

EU Indicators

発表日: 2019年11月14日(木)

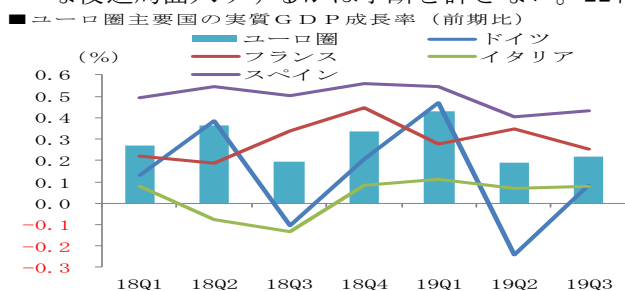
欧州経済指標コメント: 7-9月期ユーロ圏GDP

～ドイツはテクニカル・リセッションを回避～

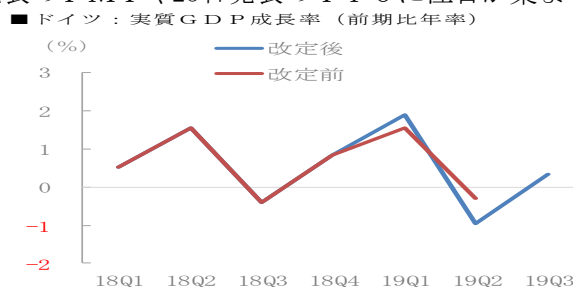
第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部

首席エコノミスト 田中 理 (TEL: 03-5221-4527)

- ユーロ圏の7-9月期実質GDP成長率の二次速報値は前期比+0.2%と一次速報から不変。前期比年率では+0.8%→+0.9%に僅かに上方修正された。新たに公表された国別内訳は、ドイツ（前期：同▲0.2%→同+0.1%）がプラス成長に復帰、フランス（同+0.3%→同+0.3%）、スペイン（同+0.4%→同+0.4%）、イタリア（同+0.1%→同+0.1%）、オランダ（同+0.4%→同+0.4%）が前期から横ばい。ユーロ圏全体の需要項目別内訳は12月5日の改定値で公表される。
- ドイツ連邦統計局が同日発表した同国の7-9月期の実質GDP成長率は同+0.1%と前期（同▲0.2%）から僅かに持ち直した。同国では7-9月期入り後の各種経済指標が一段と悪化していたため、テクニカル・リセッション（2四半期連続のマイナス成長）入りが不安視されたが、どうかこれを回避した。需要項目別の具体的な数値はまだ公表されていないが、同統計局の発表文書によれば、企業設備投資が減少した一方、個人消費、政府消費、輸出、建設投資が増加した。
- ドイツは予想外のプラス成長となったが、これは前期が下方修正されたことも多少影響。そもそも4-6月期のマイナス成長は、温暖な天候やブレグジット対応の駆け込みで1-3月期が上振れした反動が出た面もある。景気が基調としてマイナス成長に陥っていた訳ではなさそうだが、均してみても、今年に入って一段と減速傾向が強まっていることは間違いない。米中貿易戦争の一時休戦で製造業部門の調整が一服する兆しも散見されるが、景気を下支えしてきた内需関連指標の一部に変調の兆しもみられる。このまま景気が底入れに向かうのか、内需の下支えが弱まり本格的な後退局面入りするかは予断を許さない。22日発表のPMIや25日発表のIfoに注目が集まる。



出所：Eurostat



出所：ドイツ連邦統計局

■ ユーロ圏GDP（前期比年率<%>、括弧内は寄与度<%ポイント>）

	名目GDP	実質GDP	内需					外需		
			個人消費	政府支出	固定資本投資	在庫	輸出	輸入		
17/10-12月期	4.2	3.2	(1.8)	1.4	1.0	4.0	(0.1)	1.3	9.4	7.3
18/1-3月期	2.3	1.1	(1.8)	1.7	0.7	1.7	(0.4)	▲0.7	▲2.3	▲1.1
18/4-6月期	3.0	1.5	(1.7)	0.7	1.5	5.1	(0.0)	▲0.3	4.0	5.1
18/7-9月期	1.8	0.8	(1.7)	0.7	0.5	3.1	(0.6)	▲0.9	1.6	3.9
18/10-12月期	3.5	1.4	(1.7)	1.5	1.6	6.5	(▲0.8)	▲0.3	3.6	4.7
19/1-3月期	3.2	1.7	(0.4)	1.4	1.7	1.9	(▲1.1)	1.4	4.3	1.6
19/4-6月期	2.8	0.8	(5.2)	0.8	1.4	24.6	(▲0.1)	▲4.5	0.7	11.5
19/7-9月期	—	0.9	—	—	—	—	—	—	—	—

出所：Eurostat

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

